

## 学長の業務執行状況の確認結果について

令和7年3月28日  
国立大学法人宇都宮大学学長選考・監察会議

国立大学法人宇都宮大学学長選考・監察会議規程第3条第1項第3号に規定する学長の業務執行状況の確認を行いましたので、その結果を公表します。

### 1. 確認方法について

令和6年度第4回学長選考・監察会議（令和7年1月23日（木））において、事務局から、以下の資料に基づき説明があった後、学長から、令和7年1月から令和7年12月までの大学運営の取り組み及び今後の展開等について説明があり、次いで、学長選考・監察会議委員との質疑応答を行った。

- ・アクションプラン達成ロードマップに基づく年度計画及び実績報告  
（令和5年度実績評価及び令和6年度中間評価）
- ・学長就任時及び再任時の所信表明
- ・監事による業務監査の実施結果報告  
「令和5年度国立大学法人宇都宮大学監事監査意見（報告）書」

### 2. 確認結果について

別紙のとおり。

以上

## 国立大学法人宇都宮大学学長業績確認結果書（総表）

総合評価	評価	3 期待する程度であった
<p>○ 宇都宮大学は、学長のリーダーシップのもと、教育・研究・地域貢献・国際交流・大学運営の各分野で積極的な取り組みを推進し、確かな成果を上げている。特に、データサイエンス経営学部の新設や大学院の新専攻開設、高度情報人材の育成といった教育改革が進められ、地域や社会のニーズに応える形で発展している点は高く評価される。</p> <p>○ 外部資金の獲得や異分野融合研究の推進、地域連携の強化など、学術的な成果を社会実装へと結びつける取り組みも着実に進んでおり、大学の存在感を高めている。</p> <p>○ さらなる発展のためにはいくつかの課題も指摘されている。研究面では、外部資金の確保や共同研究の拡充といった成果がある一方で、支援体制の強化及び研究活動の安定的な推進に向けた環境整備が求められる。</p> <p>○ 国際交流については、交流地域の拡大や学生の海外志向を高める取り組みが今後の課題となる。</p> <p>○ 大学運営においては、学内構成員のビジョンの共有に向けた体制の充実が求められるとともに、教育・研究活動に十分な時間を確保できる環境整備が必要である。</p> <p>○ 地域連携においても、大学の持つ知的資産を最大限に活用し、より密接な産学連携や地域社会との協働を促進することが期待される。</p> <p>○ 総じて、宇都宮大学は社会の変化に対応しながら発展を続けており、今後は、多角的な視点を取り入れた大学運営の充実を図るとともに、研究・教育のさらなる発展を通じて、地域・社会・国際的な役割をより一層担っていくことが期待される。</p>		

項目別評価〔教育〕	評価	4 期待する程度を上回った
<p>○ 学長のリーダーシップのもと、宇都宮大学は地域社会の高等教育機関としての役割を強化し、時代に即した教育プログラムの拡充を進めている。特に、データサイエンスやDX、AI教育といった分野への対応として、新たにデータサイエンス経営学部を設立し、大学院においても総合情報学専攻（仮称）の開設を予定するなど、高度情報人材の育成に積極的に取り組んでいる点は高く評価できる。</p> <p>○ データサイエンス経営学部の創設は、地域経済界の長年の要望に応える形で実現し、志願倍率4.4倍という成果を上げた。これに加え、農学部の改組を進め、教育プログラムの質向上を図るなど、時代の変化に対応するための教育改革を積極的に推進している。さらに、学部生の大学院科目履修制度の導入は、優秀な学生の能力を伸ばす有効な施策として評価される。</p> <p>○ 入試広報戦略の強化が求められており、宇都宮大学の独自性を全国的に発信する必要があるという課題も指摘されている。</p>		

- 博士号授与数の未達成、大学院の論文投稿支援の弱さなど、大学院教育のさらなる充実が求められる。
- 高等教育機関として今後も質の高い教育を維持するために、教職員が学生と向き合える環境整備の拡充についても期待したい。
- 今般の教育改革では、地域社会のニーズに応え、時代に適応した形で着実に進められている一方で、広報戦略、大学院教育の充実、教職員の労働環境の改善など、さらなる発展に向けた取り組みも求められている。今後、教育の質をさらに向上させるための施策を継続的に推進し、持続可能な発展を実現していくことを期待したい。

項目別評価〔研究〕	評価	3 期待する程度であった
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 研究分野における着実な進展として、「次世代スマート農業」を推進する体制や、大型外部資金の獲得など、今後のさらなる研究成果に期待が寄せられている。</li> <li>○ ロボティクスやオプティクスなどの分野では世界水準の研究実績が生まれ始めており、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業への申請も書類審査を通過するなど、研究力向上に向けた取り組みが積極的に進められている。</li> <li>○ 研究推進機構による異分野融合事業やロボティクス・工農技術研究所における社会実装の推進も評価され、学長の地域社会との連携を重視する姿勢が、大学の研究活動にも反映されていることが分かる。特に、多様な分野の連携を促進するイチゴプロジェクトは、今後の大学の方向性を示すものとして高く評価されており、学長主導のもとで、大学全体が取り組むべき研究テーマやビジョンを掲げることで、さらなる活性化が期待されている。</li> <li>○ 外部資金獲得に向けた取組や研究業績の拡充等、研究を支える体制強化が急務である。また、教員が十分な研究時間を確保できていない現状も課題として挙げられ、特定の分野に限らず、様々な研究分野において意欲的に研究活動を行える環境整備が求められている。</li> <li>○ 地域社会との連携や実用化に限らず、基盤的研究や国際的な研究への貢献についても視野を広げ、大学内の多様な研究活動を適切に評価し、推進することが重要であるとの指摘もある。</li> <li>○ 今後、地域貢献と基礎研究のバランスを保ちつつ、すべての教員が研究活動に専念できる環境を整え、大学全体の研究力をさらに向上させることが期待される。</li> </ul>		

項目別評価〔社会連携・地域貢献〕	評価	4 期待する程度を上回った
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 社会連携・地域貢献の取り組みを積極的に進め、地域社会との関係を深めながら、その影響力を広げている。特に、「ゆうだい21」の普及に向けた活動は年々充実しており、国際的なコンクールでの高い評価を通じて、大学の研究成果が地域に大きく貢献していることが明らかになっている。</li> <li>○ また、海外展開を見据えた英語名称の導入を含め、さらなる普及を目指した継続的な取り組みが進められており、今後のさらなる発展が期待される。</li> </ul>		

- リカレント教育の充実も顕著であり、宇大未来塾や UU カレッジ、公開講座などが地域のニーズに応えながら拡充され、受講生の増加を伴う形で順調に発展している。特に、データサイエンスをテーマとした教育プログラムや、スタートアップ創出プログラムの推進により、本県のデジタル化推進への貢献も期待される。大学が持つ知的資産と地域の課題を効果的に結びつける仕組みを構築し、持続可能な地域貢献のあり方を模索することが望まれる。
- 社会連携に対する積極的な姿勢は、学内外から高く評価されており、宇都宮大学が地域社会において確かなハブ機能を果たしていることが証明されている。
- 「大学発新産業創出基金事業スタートアップ・エコシステム共創プログラム」において GAP ファンドの2プログラムが採択されるなど、産学連携や新産業創出に向けた支援も充実してきている。基礎研究にとどまらず、社会実装や地域貢献を強く意識した取り組みが進められていることは、地域の未来を支える大学としての重要な役割を果たしているといえる。
- 地域連携の取り組みをより効果的に進めるためには、大学と地域との関係を長期的に維持・発展させる仕組みを確立することが重要である。特に、地域課題と学内の研究の橋渡しを可能とする環境整備が求められている。地域との協働は一朝一夕で実現できるものではなく、時間をかけて信頼関係を構築し、地域のニーズと学内のシーズを調整しながら相互に成長できる仕組みを作る必要がある。
- 今後は、これまでの成果をさらに発展させるため、地域との協働体制をより強固なものにし、大学の持つ知的資産を最大限に活用する仕組みの整備と持続可能な地域貢献のあり方を模索することを期待する。

項目別評価〔国際交流〕	評価	3 期待する程度であった
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際交流の取り組みは、「アフリカ世界展開力事業」を中心に一定の成果を挙げており、シンポジウムの開催や研究者との交流、学生サミットなどを通じて、国際的なネットワークの構築が進められているが、持続性のためには、さらなる大学のコミットメントが必要である。</li> <li>○ 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムや、留学の推進、留学生歓迎イベントの開催など、大学としての国際的な活動が再び活発化してきている点は評価できる。特に、本学が採択された日本学術振興会の世界展開力事業は、全国 7 件のみの選抜事業の中でもベスト・プラクティスとして取り上げられるなど、その実績は高く評価されている。</li> <li>○ 国際交流全体としての取り組みの広がりには課題も残されている。特に、アフリカとの交流は推進されているが、学生のニーズを十分に反映できているかどうかを慎重に検討する必要がある。学生の海外志向が低下している現状を打破するために、より魅力的な留学プログラムを提供し、英語圏を含む多様な地域との交流を拡大することが求められている。また、本学が取り組んでいる研究分野と関連のある海外大学との連携を強化し、世界的に研究をリードする足掛かりを築くことも重要な戦略の一つとなる。</li> </ul>		

- 宇都宮大学は国際学部を擁する歴史ある国立大学としての特色を持っているが、その国際性を今後どのように発展させていくかについて、より明確な戦略が求められる。異文化融合を学ぶ学問を日本語で提供することも国際学部の役割の一つであるが、同時に、国際機関で働くことを志す学生に向けたグローバル人材育成の強化も必要であると考え。国際交流の機会を広げるだけでなく、学生が卒業後にグローバルな舞台で活躍できるよう、キャリア支援も含めた体系的なプログラムの充実が期待される。
- 宇都宮大学の規模を考慮すると、大規模大学にはない「顔の見える交流」ができることが留学生にとっての魅力となっており、こうした本学の特長を生かしながら、国際交流の枠をさらに広げ、持続可能な交流体制を構築することが望まれる。
- 大学としての国際戦略を再検討し、世界的な研究・教育ネットワークの構築や、国際機関を目指す学生の支援を含めた幅広い国際人材育成に向けた取り組みを一層強化することが期待される。

項目別評価〔大学運営〕	評価	3 期待する程度であった
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 大学運営においては、学長のリーダーシップのもとで財政改革やガバナンスの強化が進められ、特に運営費交付金の配分額の増加や入試戦略タスクフォースの設置による志願倍率の回復といった具体的な成果が見られることは評価に値する。</li> <li>○ 財政状況の厳しさの中で、あらゆる角度から予算確保に努め、コンプライアンス対応においても関係者の心情を考慮しながら対応を進めている点は、大学の持続的な運営に向けた前向きな取り組みとして認識されている。</li> <li>○ 大学運営の効率化や組織の一体感の向上については、引き続き改善の余地があると考えられる。特に、学内構成員との意思疎通や意見交換の充実が求められており、大学運営における当事者意識の向上が課題として挙げられている。学長自身が意見交換の場を設ける姿勢を示している点は評価されるものの、学内コンセンサスをいかに形成するか、学内コミュニケーションのあり方にさらなる創意工夫が期待される。全構成員が共通のビジョンを持ち、主体的に大学運営に関与できる環境づくりが今後の課題だと考える。</li> <li>○ 新たな教育体制の充実と多様化、運営コスト問題を考慮した適切な対策が求められている状況の中で、質の高い教育と研究を維持・向上させるための教職員の充足を含む体制整備を図りながら、教職員が働きやすい環境を整えることが重要である。</li> <li>○ これらの改善策を進めながら、全構成員が当事者意識を持ち、一体感を持って大学運営に携われる環境の構築が強く期待される。</li> </ul>		

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った